令和２年度第１回仙台市発達障害者支援地域協議会　議事要旨

日時：　令和２年11月４日（水）１８時～２０時
場所：　ウェルポート研修室１
出席：　野口会長、植木田副会長、石垣委員、猪股委員、大塚委員、小島委員、
小野寺委員、黒澤委員、上西委員、今委員、齋藤純子委員、齋藤まり子委員、
平委員、武田委員、馬場委員、谷津委員、米倉委員

事務局：（健康福祉局）
障害企画課　　菅原課長
障害者支援課　髙橋課長
施設支援係　長岡係長
北部発達相談支援センター　蔦森所長、
企画調整係　阿部主幹兼企画調整係長、乳幼児童支援係　伊藤係長、
学齢児童支援係　池亀係長、成人支援係　岩淵係長
南部発達相談支援センター　早坂所長、
乳幼児童支援係　大橋係長、学齢児童支援係　成見係長
成人支援係長　庄司係長
（子供未来局）
子供保健福祉課　庄子課長、児童童クラブ事業推進課　大関課長、
運営支援課　綾部課長
（教育局）
特別支援教育課　原課長

1　開会
2　挨拶
事務局　より挨拶　（北部発達相談支援センター所長）
3　委員紹介　　新就任委員のみ
4　事務局紹介　異動者のみ
5　議事

野口会長　　それでは、議事に入る。
はじめに会議の成立状況について事務局よりお願いする。

事務局　　委員19名中17名が参加し、仙台市発達障害者支援地域協議会設置要綱第５条の規定に基づき、会議が成立していることをご報告する。

野口会長　　続いて、本日の議事録署名人については、昨年は猪股委員にお願いしたので、本協議会では大塚委員にお願いしたいと思うが、皆様いかがか。
（全委員承諾）
それでは議事（１）本市における発達障害児童者支援の現状について、事務局よりお願いする。

事務局
（蔦森所長）　　（１）本市における発達障害児童者支援の現状と課題
資料１、資料３　について説明

野口会長　　今の事務局からの説明について、質問があればお願いする。

黒澤委員　　具体的なところで補足する。自閉症児童者相談センターでは、アーチルと連携しながら進めているところであり、所長から報告があったのが現状とみている。成人の難しくなっているケースは大別するとひきこもりの方が３分の１。かつ、本人以外の方で支援が必要な方も３分の１。
当センターでの学齢期相談の現状を見るとすでに二次障害が出ていて不登校が４割。かつ、本人以外の要支援者がいるケースが３割強。これらのケースが成人に持ち越されていて生活困難さが生まれている。関係機関の連携強化が求められると考えている。

野口会長　　引きこもり不登校という話が出たが、別の場所で引きこもりに関わる委員会に出ている。これまでに出ているデータを見ると、学齢期の不登校や登校渋りからなかなかフォローが続かなくなり、高校までは学校で対応できるが、そこを超えるとサポートができなくなるということがあり、その後の支援に結びつきにくい状況があると理解している。
そういう状況に対してどうサポートしていけるかがこれから大きな課題となってくると思う。黒澤さんにお聞きしたいのが、本人以外の要支援者と言った場合、どんな方が要支援者となっているか。

黒澤委員　　多いのは兄弟や保護者と言うのが一番多い。

野口会長　　兄弟の場合は本人と近いということか。

黒澤委員　　はい。

野口会長　　ほかに委員の方いかがか。

齋藤（純）委員　黒澤委員から話しのあった兄弟と保護者支援については、児童館の現場からも家族支援をどうするか、これから地域でどのようにやっていくか、サポートの入り口に来ている。
支援を要する児童に関しては、良さをどう引き出すか。家族だけでなく同級生や周りの子ども達とも行き違いが出てくる。その中で子ども同士がどのように互いに成長していくか。兄弟が其々に過ごせるためにはどのような居場所が必要か。保護者も孤立させてはいけない。最終的には地域のサポートに繋がっていくのかなと思っている。このところ強く思う。行政でのワンストップ、どうやっていくのか、いけるのか。壁を乗り越えて市民との役割分担が重要だと思う。

野口会長　まさに地域支援が大事な課題。地域と言われているが、それが実現しにくいのもあると思う。ある学校の例だが、支援学校の子どもたちの学習に居住地交流学習というのがある。これは地域支援の学習で、地域で学ぶこと、地域の仲間であり互いに学び合うことが目的である。将来の生活に結び付ける場、それを主導するのは特別支援学校であるが、なかなか大変であると聞く。コロナでも大変だが、学習指導要領に定められたことをやり、学校でもやらなければならない居住地交流学習をどうしていくか難しい。校長も知らないと大変だ。それをもとに子ども自身が良い形で学べると良いなと思う。居住地交流学習の場に兄弟がいた場合どうかと思ったことがある。あるところで重度心身障害児童の姉がいて、それが学習ということで、弟の学校に行った。その時弟は「僕の姉だ」と、とても嬉しそうに言っていた。そうなれば良いなと思う。学年が進むにつれて難しい課題が色々あり、それも一つの例だが。また他にも皆さんが直接現場で感じていることがあれば話して欲しい。

野口会長　ワンストップについて。発達障害者支援センターでワンストップの機能を持つところもあるのか。

事務局（蔦森所長）　地域での支援をどうしていくかといったときに、日頃の顔の見える連携づくりをどうしていくかがとても大事だと思っている。ワンストップですぐに対応してというのは、緊急時以外はなかなか難しい現状がある。中の相談に留まらず、外に出ていって地域の方と連係し合えるネットワークをどう作っていくかが大事と思っている。

野口会長　ワンストップというのは場の問題だけでなく、いろんな場で違うことを言っていると困ると思う。同じような形で答えが出せる、相談ができる、

同じ考え方で対応していける相談に答えていけるという場でないと困るのではないかと思う。そのあたりもお互い連携していかないと話を詰めていかないとできない部分があると思う。その点どうか。

谷津委員　質問でも良いか。今回関わらせてもらった切れ目のない支援を実現するための連携協働の在り方というのも、昨年度を中心にまとめてきた。顔の見える関係を作るためにこれまで大切にしてきた会う機会が、コロナの影響を受け、難しくなってきている。そのためプラスして新しい生活様式を取り入れた連携の在り方も考えていかないといけないと感じている。そこで、わかる範囲で、この半年、数字は出ていないと思うが、コロナの影響がどのように生じていて、今後どのようになっていくか。子ども、家族の生活、学校の教室などいろいろなことに影響が出てくると思う。自分が支援している子どもの中で、学校行事がなくなって落ち着いている子もいるが、逆に学校が休みになったことで生活リズムが崩れてしまった子がいて、未だに立ち直れていない。いつ立ち直るのか見込めず本当に大変。ステイホームがずっと続き、引きこもり不登校が増えてきているとか、DV とか虐待も心配など、これまで考えてきたことだけでなく、プラスして新たな連携の仕方も考えていかないといけないと思う。

事務局（蔦森所長）　当センターとしてまとめたことでなく、私自身が感じたところで話しをする。谷津委員の意見のとおり、今までコンスタントに学校や施設に通えていた生活リズムがあったところで、突然学校に行かなくなったことで混乱したり、見通しが立たなくなったりして、不安定になった方々が、特に自閉の特性があり、知的な理解力の課題が大きい方に多く見られていた。アーチルの来所相談では少なかったが、なないろ、ここねっとで支援している課題の大きい方々はかなり支援を求める状況にあって大変だったと聞いている。再開しても生活リズムが崩れたのが立て直せなくなり、落ち着いていた子が落ち着かなくなったり、着席していた子が着席できなくなったり、以前できていたものができにくくなって学校の対応も困ったという相談も寄せられていた。徐々に落ち着いた方もいるが、影響を引きずっている方もいて、しっかり見ていかないといけない。コロナ禍の中、個別の支援を通し、本人を軸に、関係者とネットワークを作っていく、顔と顔を見える関係づくりをやっていくことがこれまで以上に大事になっていくと思っている。また、従来の人材育成の手法は、集合形式でやる形が主流だったが、コロナ禍では難しくなっており、人材育成の在り方は知恵を出し合い、考えていくことが課題と考えている。

野口会長　　確かにコロナ禍の状況でこれまでの弱かったところが見えてきたと思う。今回の部会で報告書を作成してもらっているが、様々な状況にどう対応していくか、全く想定してなかったことも多分にある。これから何が起こるか分からないこともあるが、部会で検討した内容をどうするか、課題になると思う。他に意見はないか。

平委員　　スライド 29 について、知的障害を伴わない支援の充実とあり方について、自分の経験上、進めて欲しいと思う。経験だが、発達の特性があって、学齢期に人との信頼を作れず人と遊べずにいた過去がある人は、家族に依存しがち。それを成人期に持ち越す。学齢は信頼を作る大切な時期。放課後に人と関わる場所が大切で、放課後支援の連携が進んで子どもがより良い未来を作れるようにと思う。

野口会長　　放課後支援は大きな課題、児童クラブ等でも様々な受け入れが始まっているが、放課後等デイでは仕組みが変わって、なかなかサポートが難しい状況があるのかと思う。国の制度をどう変えていくのかもあるが、上手い方法を仙台市の中でどう見つけるのかもあると思う。或いは特別支援教育では、生涯教育と言われている中で学外をどう活用していくか、これから考えていく必要ある。

事務局（蔦森所長）　　本人が安心して過ごせる居場所がある、信頼できる大人がいて安心できる、仲間と交流できる、このような本人の居場所を地域でどう作るか、成人期に向けてとても大切だと思っている。分野を超えて本人の居場所をどう作るか、課題が大きい。具体的にどうするか。フォーマルなサービスだけではなく、インフォーマルサポートの情報も得て、委員からもアイデアをいただきたい。皆で考えたい。

野口会長　　他に意見はないか。

齋藤（ま）委員　　学校教育現場の者として、先ほどコロナ禍の話もあったが、学校の子どもたちの状況はずいぶん変わってきている。一つはコロナもあったが、保健室の満杯状態が続いていたり、不安が強い子はそれが顕著になったり、行き渋り傾向が出てきたり、本当は潜在的にあったかもしれないが、こういう状況であるからこそ現れて来ているのではないかと現場で感じている。アーチルに相談するような児童ではないが、所属する学校で他にも発達障害の特徴が無いけれども、よく見ると言葉の意味の理解が不

十分であったり、対人関係が上手くいっていない、障害とまでは特定されない児童が躓いている現状を感じている。それらの児童の学齢期の切れ目ない繋がりを考えると、入学時点でアーチルに繋がる児童いる一方、繋がらない児童がたくさんいると感じている。たぶんその児童たちがちょっとしたことで躓いたり、上手く乗り越えられなかったりして、いろんなライフステージで不登校の予備軍になるのではないかと心配している。そういう児童がアーチルの資料に載ってこない児童だと思っている。その児童たちを支援していくのは学校だと思うが、9 年間の小中学校の時代では、学校は学校の時代があって過ごしている。その後が心配という児童はたくさんいるという現状。学校の施策の中で、特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室、という枠組みがあるが、学校現場の様子を見ているとその枠組みの中だけで納まらない子どもたちがたくさんいると感じている。特別支援学級のように教育課程まで組み替えて支援していく児童ではなく、通常学級の中で、通級指導教室と考えても利用までにハードルが高く、また全校にあるわけではないので、行き渋っているとか勉強が分からなくて躓いている児童がたくさんいて、一生懸命対応するが、どうしてもそこの枠と支援の枠、そういって良いのか分からないが、従来の教育と支援システムだけでは救いきれない児童たちが、いずれは就労場面で引きこもったり、躓くのではと危惧している。

野口会長　グレーゾーンという言葉があるが、最近強く感じるというか、知的なレベルでのグレーゾーンが昔から言われているが、何等かのサポートを必要としているが、実は特別支援の教育の中では対象にならない子が多数いて、それを考えていかないといけない。学校現場では様々な子に対してどう支援し、サポートしていくか、学校だけでは難しいと思うが考えていかないといけない。

齋藤（純）委員　児童クラブに登録している児童で、放課後等デイサービスに登録している子が多くなってきた。このことに関しては該当する児童にとって居場所が一つ増え、児童クラブだけではなく放デイに行くことで、造形を通した活動等その児童にあったマンツーマン活動ができている。最初、保護者はあまり放課後等デイサービスの利用について分からず、色々な話をする中で知っていく。コーディネートすることは児童クラブとして出来る。子どもが持っている力が新しいところで開花する。それを考えると児童館は繋ぐステーションになるのかなと思う。学校の先生方も思い悩んでいるのがよく分かる。学校も児童館もその児童の良さをどうすれば個性を発揮できるのか共有しないといけない。理解してどう指導して

いくかに繋がるので、児童館だけでは絶対できない。「学校や地域、放デイとかが一緒にやって行く」と言わなければ、現場が混乱する。色々と繋がった結果が、児童にとっても親にもとっても繋がりができて、良い感じに出来ていけば色々とできると思う。学校も頑張っている。互いに、個人情報がある中でも共有してやっていけるので、学校にも遠慮しないでいきたい。

野口会長　児童館にいる子どもの姿と学校にいる子どもの姿が全然違ったりするので協力していけると良いと思った。
議事の２の方に入る。学齢期における連携の在り方、この報告書に関して、部会の植木田会長より取り組みの様子などにも触れながらご説明をお願いする。

植木田副会長　部会の方をまとめてきた。詳しくはお手元の資料、報告書の方をご覧いただきたい。簡単にどのような議論かを報告させていただく。また、その成果はこの報告書にまとめられている。委員からは多方面の専門家や保護者の視点で意見をいただき、それぞれの役割立場を理解しながら議論を進めてきた。この報告書で工夫した点は、作るプロセスにもあったが、それぞれの専門的な立場から、どのような支援をしているのか、具体的な支援を共有してきたことにポイントがある。取組事例概要に記載の通り具体的な事例から支援を考えてきた。いわゆる診断名ではなく、支援の質というか、どういう困り感があるのか、本人とその家族周囲の支援者にとってどのような課題があるのかというのは静止画のようなものではなく、文脈の中で表れる。障害というものも本人の器質的な制限ではなく、社会との相互関係というかバリアの話になるが、社会との関りの中で障害が立ち現れる。具体的な支援の文脈の中でないと困り感に行きつけない。それぞれの立場から取り組みや課題を忌憚なく議論いただいて報告書ができた。難しいところは、福祉で支援している専門的な視点と、幅広く障害のない子も含めて全ての子どもたちに目をいきわたらせる必要のある学校・児童館というところ、個にどれだけエネルギーを注げるかシステム上違いがあるので、どう連携していくかに困難さがあると改めて感じた。個々の相談支援に携わっている人は目の前の人に100の力を使えるが、学校教育の中では40分の１に分散される。その中でそうした支援の必要な子を置き去りにするのではなくどのように支援していくかという難しさがあり、改めて文脈の中で理解ができたのではないかと思う。それぞれ思いがあって支援を勧めている立場ではあるが、船頭が多くて道が定まらないということにならないように、縦糸と横糸

の結び目の大事さがあると感じた。そのあたり、P16 からの必要な支援体制についてということでコーディネート機能をはじめとして 4 点に議論がまとまっている。大まかな会議の中での議論の方向性はそのように行われた。報告書の概要については事務局からご報告お願いしたい。

事務局
（蔦森所長）

資料 2 に基づき概要説明。
参考資料 1・2 のとおり、10 名の委員には活発にご議論いただいた。また、事務局に入っている児童クラブ推進課、特別支援教育課にも協力をいただきながら、2 年半にわたって 7 回部会を開催し最終的に報告書をまとめたところである。目次から説明する。報告書の構成は中間報告としてもご説明したが、前回の協議会を踏まえて 4・5 の項目を加えてまとめた。4 は関係機関の取り組みをまとめたもので、委員にもヒヤリングを行い、具体的な事例の取組について述べ、課題解決のヒントをまとめた。4 で具体事例を共有し、連携を推進のために何が必要か、委員にも様々ご検討いただき、5 で必要な支援体制ということで整理した。この報告書のまとめとしては、本人を中心として、本人と家族が安心して地域で暮らすためには、支援分野の異なる互いの立場と役割を理解尊重した上で、互いに何ができるかを考え、互いに主体的に行動するのが必要であると述べている。
P22 から先ほどのことを踏まえて、学齢期の支援体制としては、コーディネート機能、顔が分かる関係、連携ツール、互いの立場の尊重、支援機関の人材育成を要素として包含してそのシステムに入れて、それが上手く機能していることが重要とまとめた。最後の部会では、報告書をまとめて具現化していくために、これをどこかに委ねるのではなく、委員も事務局もそれぞれの立場で主体的に何ができるか意見交換できたのが重要だった。

野口会長

植木田副会長より補足はないか。

植木田副会長

十分議論が尽くせる時間は無かったと思う。会長や谷津委員からご指摘あったが、コロナ以前の話し合いで、そこからコロナが出て、新しい対応を考える必要があると思うが、その点も含めてご意見賜りたい。もう一つ、斎藤（純）委員からもあったが、発達障害に詳しい人だけが関わるのではなく、周りの地域の人をいかに巻き込んでいけるかが課題。これからの議論が必要なところと感じる。

野口会長

報告書の内容について、前もってお渡ししていたこともあると思うので、

ご質問を含め、報告書を踏まえて今後さらにこういう検討が必要とか、実現していくうえで課題があるなど、ご意見いただければと思う。

平委員　これを読むと仙台市内での引継ぎ連携については取り組まれているが、私自身の経験だが、幼少期仙台に住んでいて、その後山形に行き、ますます支援に繋がらなくなった。自治体同士の繋がりについてはどのように考えているか。

事務局（蔦森所長）　自治体をまたいでの転居で情報の引継ぎとなるが、基本的には本人や家族の希望を踏まえて、そこに基づいて、他都市の発達センターに繋いでいる。しっかり本人家族の希望を踏まえて情報共有して、それを大事に進めたい。

野口会長　非常に大事な視点、市内でどう連携体制を構築するか。自治体によって違うことがある。様々なことをどう体制に取り込めるか、考えていかないといけない。相手がどうであっても常に考えていく必要がある。

大塚委員　アーチルに質問。報告書のＰ９のところに、情報共有のためのツールの活用、サポートファイルの活用ということで、私もお母さんの話を聞いてすごく良いと思っていたが、気になったのは、「見せるのはためらいがある」というのは問題。人に見せるのにためらいがあるというのがどういうことなのか知りたいし、ファイルの中ではたくさん情報があるので、アーチルに行ったことがあるだけなら伝えて良いということなのか、全てシャットアウトということなのか。

事務局（蔦森所長）　サポートファイルは、だいぶ前に保護者の方に実行委員に入ってもらい、保護者とアーチル協働で作成した。本人の情報を本人・家族が必要な支援者等に示して共有していくものとして作成した。全部の情報を渡すというより、必要なものを選んで出せるように工夫している。アーチルの初期グループの頃から渡しているが、渡して保護者がどう活用していくか、保護者の中でお子さんの状態についてまだ受け止めかねる場合や伝えたことでどうなるかと不安があると折角持っているものが有効に使えないという状況もある。親がどうすると有効に活用できるのか、私たちも保護者と普及というか、もう少しこう使っていけるとメリットがあると、保護者にも広げていく課題があると思う。そういったことを含めてためらいがあると言うことなのではなか。

大塚委員　どのくらいの方が数値としてためらっていて、どのくらいの人がオープンにしているのか。

事務局（蔦森所長）　特別支援教育課の協力もいただきながら、新就学の時に活用していきましょうとコーディネーターの先生が集まる場で話をしたり、進めているところ。もう少し進めていけたらと思う。

野口会長　実効性というか有効性というか、一つは信頼だと思う。相手に対しての信頼、サポートファイルを活用する信頼、そこをどうしていくか。新たな支援者に出会った場合にも使っていくと期待するが、どう使うかが課題。

猪股委員　保護者の立場で協議会と部会に参加している。感想になるが、一言、部会でまとめたものを見て情報が詰まっていてすごいなと思う。上手くいった事例そうでない事例、色々なケースがあると思った。連携のところで、例えばその子のその時の安心が得られて、連携が上手く行ったとしても、その時だけではなく、その子の将来の姿を保護者も含めてだんだんと見つけられると、積み重なっていくと良いと思った。今、上手く行ったことや、それがどう将来に繋がるのか。例えば不登校事例なら学校に通えるのがその子にはプラスのなのか、それとも他にも選択肢があるのか。保護者も支えてもらって上手く子育てに参加できると良い。学齢期は保護者と子どもの関わりは深い。親はだんだんと子育てから手を離れていかなかければならないと考えている。支えてもらいながら見つけてもらえると良い。早期に分かっていれば、乳幼児童期に積み重なることもあると思う。

野口会長　将来像はなかなか見えにくいが、サポートすることで、一時的ではなく、長いスパンで見ていくことが大事と思う。他に意見ないか。

馬場委員　障害者職業センターは成人期の方の利用が多い。発達障害の方は、障害者職業センターと名がつくので、障害者手帳を持っている方が来るかというと必ずしもそうではない。高校・大学を卒業して、コミュニケーションや対人関係で上手くいかず、離転職を繰り返す方もいる。本人視点に立ち、障害者として開示して就職したいというところにたどり着く中で失敗経験もある。次に開示して就職したいという時に、ジョブコーチとか色々な支援があるが、そこにたどり着くまでに限界が来る方もいる。対人関係など本人が安定して就労するというのが難しいところもある。

事業所に理解してもらうことも大切。苦手なこと得意なこと、事業所に配慮して欲しいことを履歴書に併せて提示して説明することも必要で、苦手なところは理解してもらい、得意なこと配慮して欲しいことは事業所とすり合わせが大事。また当センターでは人材育成ということで、学校、福祉機関、事業所側が理解して本人を支援していけるように、雇用支援にかかる関係機関職員の人材育成にもかなり力を入れている。本人のスキルアップに取り組んでいるが、支援者の人材育成にも努めている。福祉機関にもケース会議等を通して、コーディネートの仕方などを助言し、連携することで当該機関の人材育成に努めている。周りの環境、調整や連携しての支援を行うことで、適応していけるケースが一つ一つ増えていくと思う。

野口会長　そこをどう掘り下げていくか非常に大きな課題。1 年後の定着率は、就業形態でも違うが一般就労で障害を開示しているかいないかで定着率も下がる。本人自身の力をつけるのも大事だが、社会のサポート体制も大切。

石垣委員　先ほどより、たくさんの委員から話を聞くと、知的には問題ないが、二次障害や不登校の問題の子がたくさんいるということだが、私も問題と感じている。現在、落合保育所に勤務しているが、以前にも落合保育所にいたことがあり、その時担当した児が小学校高学年・中学校になっていて、その子たちの中で二次障害や不登校になっている児が何人かいるということを聞いた。知的には問題なく、アーチルにつなげる必要ないとは思っていたが、やはりなと感じた。保育園時代から他の子どもとの関係が上手く取れない、保護者が子育てに苦労、躓き、更に学齢になって大変と聞いていた。小さい時の子どもの理解がとても大事と思う。アーチルだけではなく、児童発達支援センターやコロナ禍で前進していないが、5 歳時健診など、障害枠には入らないが特性を持った子を見つけて支援するのが必要と思った。

野口会長　幼い時に理解しサポートしていけるかというのが、特性としては明確に出ていないけれど、支援が必要な状況に変わりがないという子どもがたくさんいる。その点に関して、小島委員いかがか。

小島委員　園の中にいわゆる気になる子どもで、アーチルに私たちが繋げたくても父母と話すと、「うちのお父さんもそうでした」となり、なかなか専門機関に繋がらないということがある。一例をあげると 3 歳から見ていて、

新しい場面になじめず、子どもがそれに向き合って苦しそうにしているのを見ると、何としても母に理解してもらい、次の学校に配慮を求めたいと思い、園では保護者に必ず心配であると伝えるようにしている。認定こども園の仲間たちが全てそのような目を持って子どもを見れるかというと難しい現状があるので、乳幼児期のところでキャッチできず学校に行くお子さんは多い。その後に子どもが不登校やいじめにあうということを見聞きする場面もある。その現状からも早期に見つけて、早めに何らかの支援と子どもの理解をして行くことが大事だと思う。当園ではそのような取組みの中で親から嫌われることもあるが、何とか頑張っている。こども園協会としても、特別支援の研修会を設けたり、アーチルと一緒に研修会をしたりして、私どものスキルを上げていくことに力を入れている。

野口会長　同じ乳幼児期の支援というところで、小野寺委員いかがか。

小野寺委員　今のことに続いてだが、仙台市では就学前療育支援推進モデル事業として令和元年からペアレントプログラムと併行通園を行い、その実施事業者として関わっている。ペアレントプログラムは「のびすく」を会場にしている。子育て支援の場ということでハードル低く、本日も実施したが、プログラム実施の中で個別に幼稚園でこんな姿があるという相談を受けるなど、併行通園を紹介する機会となっている。併行通園では保護者のグループワークにも重きを置いていて、学校に入る前に子どもへの理解を深める勉強会や、我が子について話し合える仲間づくりはとても有効だと思っている。モデルに留まらず一般事業化されると良い。市では児童発達支援センターを利用し発達に不安のある段階から無料で相談できるシステム作ってもらっているが、その先となると誰でも障害保育枠に入れるわけではない。お子さんの発達状況だけでの判断だけでなく、不安が強い大保護者には個別に考えてもらって、何らかの支援が継続できるような環境があると良い。早期出会いの段階で相談と支援をセットで紹介し、乳幼児期から子どもの発達支援をつづけられるとともに家族支援も必要と考えている。

野口会長　まだ発言なされていない委員の方いかがか。

上西委員　今までの先生方とは違う視点で話したい。高校でスクールカウンセラーをしていて、発達に特性のあるお子さんたちと関わっている。多いトラブルが、SNS に絡むところ。特性のあるお子さんだけでなく定型のお子

さんでも多いが、特に偏りがありそうなお子さんが巻き込まれている印象がある。SNS のトラブルは対人トラブルと依存傾向のトラブルで大別される。特に依存に関しては、定型のお子さんたちとの差異が顕著である。そこが本人たちというよりは、保護者の話を伺うと、保護者の認識が薄いところが課題になっている。幼少期から早い段階で、特にひとり親の家庭だと子どもが集中して見てくれるということでタブレットを与えていて、あることが当たり前のお子さんになっている。その場合、中高生で取り上げようとすると関係性が悪化するということ等がある。その使い方は、本人の課題というよりは保護者の課題となっていると思う。2 歳児の相談が多いとなると、将来的な SNS スマートフォン・タブレットの使い方もペアレントトレーニングの一環として入れていけると良いと思った。SNS の中では誹謗中傷的な内容で行われおり、いろいろなアプリケーションが使われていても、保護者は実情を何も知らないということがある。カウンセリングを高校でやっていると、保護者面接で実態を言うとびっくりするということがある。保護者に SNS やスマートフォンの現状をお知らせすることは、各教育段階の中で積極的に取り上げていっても良いのではないかと思う。

野口会長　それも非常に大事な視点。依存はなかなか抜けられない。親もどう対処して良いのか、特性ない子も難しい。特性ある子はなかなか抜けられない。

米倉委員　感想だけ、私は成人期の支援が主なので。児童期は深刻だと思った。大塚委員から話があったが、サポートファイルを見せるのをためらう親がいると聞いて、受け手の支援者としては、見たときに批判的なことを言わないとか、受ける側がどうプラスに返していけるかなど考えていかないといけないと感じた。そうしないと保護者も活用しないだろうと、考えていかないといけない課題だと思う。

武田委員　昨年の 9 月からスクールロイヤーの肩書で活動している。主に学校の校長・教頭などの管理職から相談を受ける立場だが、主にいじめについて。今年度は広く先生が困っていることについて相談を受けている。その中で児童間のトラブルについて、話を聞くと何かしらの特性を持った子が他の子とトラブルということから始まるが、先生の一番の悩み保護者の対応。保護者の言うこと、気持ちも分かるが、全てを教育の場、特に担任が窓口として対応している。教育現場が非常に疲弊しているなと感じ

る。福祉との連携が上手くいっていないのもあるが、報告書の中で保護者が支援を受けたいという気持ちが無い事例などもあり、また保護者自身が支援を必要とすることが多いなど、家族全体を地域で支援する体制があれば良いと思う。教育の現場も本来の教育に力を注げるようになれば、まんべんなくいろいろな子に指導できるのにと思うことがある。自治体によっても取り組みや専門職の関わりが違うなと思うし、必ずしもある同じ枠組でなくとも良いが、ワンストップではないが、ここに繋がれば良いという仕組みがあれば良いと思う。

今委員　小児科からの話。就労を迎えた大人の方たちの抱える問題、小児期にその子がどういう力を持てば良かったのか、どのように対応をすれば良かったのか振り返るのも大切。結果的に言うと、特性の明らかな子は診断可能だが、年齢が高くならないと診断ができない子がいる。診断がつかないと支援ができないということにならないようにしたい。塾に通っている子が先生にいきり立ったら、そんなに怒らなくてもいいんじゃないと周りの子どもたちが話してくれたり、周りの子どもたちが支援できたり、人と人がどのように支え合うかということを小さいうちから経験させる。障害の有る無しに関わらず小さい年齢から始める。保護者にも支える側にも回るし支えられる側にも回る、こんなに楽しく生活できるんだ、というそういう連携システムができると良いなと思って伺っていた。

野口会長　お互い尊重し認め合うということはいじめにも関わってくることかなと思う。次に次第のその他に入る。
委員から何かあるか。
特に無ければ以上で議事を終了し、進行を事務局にお返しする

6　その他

事務局　最後に事務的な連絡を申し上げる。本日の議事に関しまして、追加のご意見等あったら、事務局まで11月10日火曜日までにファックスやメールにて送付をお願いする。
また、本日の議事録について、事務局にて案を作成の上、委員の皆さまにお送りする。案に加除修正をいただき、返送いただきたい。これに基づき、事務局にて修正作業を行い、議事録として確定させてもらいたい。協力のほどお願いする。

7　閉会

令和　2　年　12　月　21　日

署名委員　大塚達也　印